

## エスノメソドロジー素描

－エスノメソドロジーで誰が何を明らかにするのか－

鈴木 雅 博

A Rough Sketch of Ethnomethodology: Who Studies What in  
Ethnomethodology?

Masahiro SUZUKI

2018年11月9日受理

### 抄 録

本稿は、エスノメソドロジーが明らかにするものとは何か、そして誰がその担い手になり得るのかについて素描することを試みる。エスノメソドロジーは、対象の取り扱い方、それを扱う者に求められる能力、あるいは知見の身分において従来の社会科学の説明とは異なる方針をとる。エスノメソドロジーは研究者による概念定義や理論を起点とするのではなく、また、人びとのやりとりをリソースとして一般理論化をはかることもしない。それは、その場の実践が理解可能なものとして編成されていることをトピックとして分析的に記述する。実践における人びとの方法・能力を記述するためには、調査者自身も研究法に加え、対象者と同じ（少なくとも何が行われているかがわかる）能力を身につけることが求められる。これとは反対に、ある場においてそうした能力を持つ者が研究法に精通することで「ハイブリッド」化する道もあるだろう。

キーワード:エスノメソドロジー, インデックス性, 一般化可能性, 自然言語の習熟,  
ハイブリッド

#### 1. エスノメソドロジーで何を明らかにするのか

本稿は、エスノメソドロジーが明らかにするものとは何か、そして誰がその担い手になり得るのかについて素描することを試みる。そのために、まずは私自身の経験を例として、エスノメソドロジー（以下、EM とする）が明らかにするものが従来の社会科学におけるそれとどのように異なるかを試論的に示してみたい。まずは、下の発言を見てほしい。

01 A: エアコンつけたよ。

この発言から理解できることは何だろうか。前後の文脈がわからない状況では、01が「エアコンのスイッチを入れた」のか、それとも「部屋にエアコンを設置した」ことを意味するのか判然としない。もう少し続きを見てみよう。

- 01 A：エアコンつけたよ。  
 02 B：あ、すみません。  
 03 ってか、俺が開けたんじゃないんだけど。

以上がその場で交わされたやりとりのすべてである。状況はこうだ。初夏の頃、大学教員である私（＝A）は授業のために教室に入ったが、蒸し暑かったので、エアコンのスイッチを入れた。その時、風を入れるために教室の窓は開け放たれており、窓際に座り談笑していた二人組の学生に呼び掛けたのが01の発言である。それへの学生（＝B）の応答が02-03である。これらを踏まえてあらためて断片に目を向けて見ると、私たちは以下のことを理解できていることに気づく。一つは、01は単なる事実の報告ではなく、「エアコンのスイッチを入れたので、窓を閉めてほしい」という「依頼」となり得ること。いま一つは、02はエアコンが作動しているにもかかわらず、窓を開けたままにしていたことへの「謝罪」であること、である。

以上の分析はまだ十分なものではないが、分析を進める前に、そもそも何を殊更にそんなことを記述しているのか、という疑問に答える作業をしておきたい。まず、従来の社会科学的な説明と対比してみる。ここで「従来の社会科学的な説明」とは、ある理論や研究者の定めた概念定義を起点として、対象に目を向けるといういき方、そして、対象をリソースとして一般化可能な説明を生成／検証しようといういき方のことを指す。この方針に基づくなら、上記の断片に与えられる一つのあり得る説明は次のようなものとなる。例えば、政治学者のDahlによる権力論を理論的な拠りどころとしてみよう。彼は、「AがBに対して、さもなければBがしないような何かをさせる限りにおいて、AはBに対して権力を有する」との権力概念を提示した。これを権威として、先の断片を見るならば、そこにはまさに「AがBに対して権力を有する」関係が成立していることを見て取れる。そして断片は、「教員の学生に対する権力は授業という枠組みを超えて存在している」ことを例証するデータとなり、それをリソースとすることで教員・学生間の権力関係の一般理論化がはかられるかもしれない。当然に、データ収集にあたっては教員や学生に関する性別・年齢といった属性が統制・考慮されることが求められるだろう（仮にAが男性でBが女性なら、それはジェンダー間の権力関係として語り得るものになるかもしれない）。データは観察やインタビューあるいは質問紙調査によって収集され、計量的に分析されることもあるだろう。

しかし、これによって与えられる説明は、その場の人びとがどのようにして、そのやりとりをまさにそのようなものとして成し遂げているのかを明らかにしてはくれない。そして、具体的なやりとりは、一般化された知見が導き出された後には背景に退き、あまたある事例の一つとしての身分が与えられることになる（時には、「外れ値」

としてまったく顧みられないこともあるだろう)。

では、人びとがやりとりを成し遂げていることに目を向けるとはどのようなことか。当初の断片に立ち戻り、もう少し分析を加えることでそれを示してみたい。Bの反応はいくつかの水準で分析できる。その一は、01に続くことで、それが独り言ではなく、会話の一部であること、その二は、「あ」という発言の含意である。「あ」は、自分がそれまで気づいていなかった情報、しかもそれが気づくに値する情報であることに、まさにいま気づいたことを聞き手に示す標識となっている(西阪2001:198-206)。仮に、Bの返答が「あ」ではなく「え」だったら、それはその時点では「気づき」が達成されていない標識として聞き手に伝わる。それは、①Aの発言を聞き取れなかった、②Aの発言の真意が理解できなかった(例えば、自分の方が窓から離れたところにいたらAの発言の意味をすぐには理解できないだろう)、③Aの依頼を拒絶した、といったことを示している。①から③のそれぞれによって、Aの返答は異なってくるだろうが、「え」は少なくともAの応答(例えば、「窓閉めてほしいんだけど」といったように依頼の内容を明示すること)を要請する。

そして、その三はBの反応が「謝罪」となっている点である。通常「依頼」に対しては「受諾／拒絶」という応答がふさわしいが、Bの「すみません」は「謝罪」に聞こえる<sup>1</sup>。「謝罪」に対応するものは「非難」であり、Bは01をそう聞いたのだと言える。では、それはなぜか。01が非難として聞かれるためには、例えば、発話の語調や発話者の表情という情報も有用だと思われる。しかし、笑顔で相手を非難することも可能であり、表情や語調が特定の行為(ここでは「非難」)と常に対応しているわけではない。実際、01が発話された際に、Bは友人(=Cとする)と談笑しており、Aを見ていない。語調もむしろ親しみを込めたものだった(と思う)。では、01はどのようにして「非難」たり得るのか。それは、「エアコンのついた部屋」という主部と「窓やドアが閉められている」という述部が強く、しかも規範的に結びついていることを私たちが知っていることに由来する。01が親しげな調子で発話されたとしても、「エアコンがついているにも拘らず、窓が全開になっている」という目前の事実は、先の規範を参照するなら「非難」として聞かれ得る。もちろんそれは、01が「依頼」として聞こえる可能性を排除しない。01は「依頼」としても「非難」としても聞こえる可能性を備えていると言ってよい。実際、Bは02の後、席を立てて窓の方に動き出す。この身体的動作は依頼の「受諾」をあらわしている。このような身体的動作への着目がその四の分析水準となる。

その五は、なぜ他ならぬBが01に反応したのかという点である。先述した通り、01の時点でBはAの方を見ていない。そして、教室にはBたち以外にも、もう一組の学生がいた。それにも拘らず、BはAの発話を自分たちに向けられたものとして「正しく」認識し、依頼を受諾する。これは単なる偶然ではない。では、なぜもう一方のグループではなく、Bたちが、そしてとりわけBが反応したのか。端的に言えば、Bが窓に一番近いところにいたのである。別の一組は教室後方の廊下側に座っており、並んで座るB・Cでは、Bの方が窓の近くに座っていた。Bの反応は「窓を閉める」

という行為が「窓に最も近いところにいる者」の権利・義務として結びついていることによって、理解可能となる。そうであるからこそ、Aの発言がBへの依頼として成立し得る。仮にエアコンのスイッチが窓際にあり、Aがスイッチを入れながら（つまり、窓に一番近い場所で）、窓から遠く離れたBたちに「エアコンつけたよ」と告げたなら、それを「窓を閉めてほしい」という依頼として聞くのは難しいだろう。

その六は、03の発言がしていることは何かという点である。Bは席を立ちながら、「ってか、俺が開けたんじゃないんだけど」と発言する。「ってか」(=「ていうか」)は、「先行する自分や他者の発言との間に距離をおき、あたかもその発言を第三者である誰かが言ったかのように提示しながらなおかつその後にもう1つの可能性となる要素が続くことを示唆する」機能を持っている（高木・細田・森田 2016：218-219）。この場面で、Bは「ってか」と述べることで、自らの「すいません」という「謝罪」との間に距離をおき、その修正を試みている。たしかに、エアコンがつけられたことを知っているのに窓を開ける／開けっ放しにしているなら、それは非難に値するだろうし、エアコンをつけたことを知らなくても自分が窓を開けた当事者なら、そうでない場合よりも窓を閉めるという行為により強く義務を感じなければならないだろう。しかし、Bはこれらに該当せず、非難に値する義務不履行があったわけではない。となると、Bにとって「謝罪」は適合的でない反応であり、修正を施す対象となる。ちなみに、この発言は友人であるCに向けられていた。つまり、Bによる03は、それまでのやりとりをCが理解していることを前提に、「聴衆」であったCを宛先とした修正を行うことで、それをあらたに「聴衆」に位置づけられたAにも聞かせる指し手となっている。こうしてBは、「ってか」という発話を通して「非難→謝罪」という反応に修正を加えつつ、窓に向かうという身体的行動によって「依頼→受諾」を表示する実践を行っていた。

さて、以上の分析はさしあたり「権力」といったものとは関係がない。ここで起きていたことを「教員」・「学生」といった制度的に規定された、あるいは「長幼の序」といった文化的に規定された権力関係によって説明する必要はあるだろうか。仮にそうした説明が行われるなら、それは実践への参与者ではなく、研究者の側の関心を投影したものだと言えるだろう。彼／女らが参照していたのは「エアコンがついている部屋では窓は閉められるべき」という主・述の規範的な結びつき、そして「近くにいる者が窓を閉めるべき」という行為をめぐる序列である。仮に、Aが教員でなく学生であったとしても、つまりそこに制度的文化的な権力関係が存在しなくてもやりとりはほぼ同じように成り立つだろうが、先述した通り、窓に近い教員が遠くにいる学生に01の発言をしたら、ことは同じように進まないだろう。

また、こうした分析は「窓に近い」の「近い」とは何mまでなのかといったことを規定することもない。人びとは精確な定義づけを行っているわけではないけれども、その場に即して、「あ」や「ってか」といった、ともすると無視されてしまいがちな発話を含めた語りや目線、身体の動きといったものから、それぞれが何をしているのかを即座に理解する能力を持っている。私がここで試みた分析も、その場の人びと

同じ身分において、その能力を使用したものに過ぎない。もちろん、そうしたことを研究者による定義を起点として分析することを慌てて否定する必要はない。しかし、研究者が「権力」という概念や、その場の人びとの志向とは関係のない精確な条件統制を持ち込もうとするなら、それは人びとの実践から離陸し、より多くの人を覆う「天幕」づくりへと向かうことになる<sup>2</sup>。

EMは、人びとのやりとりを理論の生成／検証のためのリソースとするのではなく、それがどのようにして達成されているのかをトピックとする。それは、日常生活をそれとして成立させるための方法やそれを用いる能力をその都度の人びとの実践に即して描き出そうとする試みである。しかし、こうした方針は、私が取り組んできた学校組織研究においては、ほとんど採用されてこなかった<sup>3</sup>。ここに記したエピソードへの分析は、学校組織でのやりとりを扱ったものではないけれども、EMが従来の社会科学の探求とどのように異なるかを試論的に提示することはできただろう。以下では、さらにEMの方針の原点を確認し、その方針による研究の担い手となることについて論じたい。

## 2. 知見の一般化を目指さない——インデックス性の不可避

EMとは、人びとが日常生活の実践のなかで／として社会的事実を成し遂げる方法論およびそれを対象とした研究を言う。これは、人びとがごく普通のなじみの（それ故に意識することもない）やり方によって、それぞれの場面を、その場の人びとにとって合理的でアカウンタブルなものに、すなわち、そこで話されていること／見られていることが何であるのかがわかるように、その都度成し遂げていく実践をそれ自身の権利において明らかにする試みである。EMの創始者である Garfinkel (1967) は人びとの実践がEMの対象となる点について次のように述べている。

社会学者は、社会的に構造化されている日常生活の場面を出発点とみなしているけれども、常識的世界が、そもそもいかに可能なのかという一般の問題を、それ自身の権利において社会的に探求すべき論題として論ずることはまれである。むしろ、日常世界の可能性は、理論的な表現を押し付けられているか、もしくはただ単に仮定されているかのいずれかにすぎない。日常生活の常識的世界に明確な規定を与えることは、社会学の探求目標としてまたその方法論上の基盤として、究明しなくてはならない適切な課題であるにもかかわらず無視されてきた。(訳書 34, ただし、訳語は一部変えてある。)

ここで「それ自身の権利において」とは、研究者がその場面にとって外在的な社会的要因や理論的枠組みを説明のために対象に押しつけないことを意味している。つまり、EMは社会的事実をあくまでも人びとの実践のなかで進行的に達成されるものとして捉えることを自らの方針とする。そしてこれは、Durkheim (1895: 訳書 69, 強調は原著) が社会的事実を「個人のうえに外部的な拘束をおよぼすことができ、さらにい

例えば、固有の存在を持ちながら所与の社会の範囲内に一般的にひろがり、その個人的な表現物からは独立しているいっさいの行動様式」と定義づけたことは対照を為す。EMは従来の社会学のように性別や年齢、宗教、階級といった属性を安定的なものとして見て、また研究者が概念定義を与えることで安定化させ（たと見なし）、それらを変数として、観察された場面に因果的説明を与えることをしない<sup>4</sup>。

EMは因果的説明や知見の一般化を目指すことが困難である点について、あらゆる表現が、置かれた文脈に応じてその意味を変容させること＝「インデックス性」が不可避であることから説き起す。インデックス性とはEMにおける鍵概念の一つであり、Garfinkel and Sacks (1970) によって提示された。そこでは、「私は入門者である」という文章を例に、それが場面によって真理／虚偽に変容することが指摘されている。つまり、誰がそれを言うのか、あるいは同じ人物であっても、どのような状態（時間・空間・対象）でそう言うのかによって、それは真理にも虚偽にもなる（168）。

ある事象が文脈によって異なる意味を付与されることは、後期 Wittgenstein によって探究されており、Garfinkel and Sacks もここからの示唆に言及している。Wittgenstein (1953) による例示は次のようなものである。建築家Aが叫ぶ「石板！」との語は、助手Bにとっては「石板を持ってこい！」との命令として聞かれる（§ 2）。「石板五枚」も同様に命令として聞かれ得るが、それはBが問うた石材の数量に対するAによる報告・陳述として聞くこともできる。語が発音される調子や顔つき等で両者を弁別することも考えられるが、命令も報告・陳述も様々な調子・顔つきで発し得るため、両者が同じ調子で為されることもあり得る。つまり、両者の違いはそれらが発せられる言語ゲームにおける役割の相違に求めることができる（§ 21）。このことは言語と対象との関係は固定的なものではなく文脈依存的であること、そして特定の条件づけを行っても固定的な対応関係の定立が困難であること、そうでありながらもその場の人びとにとっては発せられた語が何を意味しているかが了解可能であることを示している。

このような特質を持つ「言語と言語の織り込まれた諸活動との総体」を Wittgenstein は「言語ゲーム」と呼んだが、これは言語やそれによって表現される社会的な事象を特定の実践から離れて一般的な定義を与えて論じることが不可能であり、言語の意味は人びとがそれを使用する実践のなかで／として成し遂げられることを説くものである。Garfinkel (1967) の以下の論述はこうした主張と相似形である。

通常の談話の特質として公認されていることは、相手は理解をしてくれるものだとして予期すること、それぞれの表現はその場限りのものであること、指示にはそれ固有の曖昧さがあること、現在の出来事には過去把持的・未来予示的な意味があり、したがって前に意味されたことを確認するためには次に何が語られるかを待たねばならないこと、こういったことなのである。この特質が、見られはするが気づかれないまま、通常の談話の背後基盤となって、実際の発話は、ありふれた・筋の通った・理解可能な・よくわかる話といった出来事として認知されるのであ

る。このような談話の特質があるからこそ初めて、成員たちは、何がいま話題になっているかを知っていること、ならびに、自分たちの語っていることが理解できるものであり、かつ理解されなければならないものであること、このことを主張する資格を自ら得るとともに、相手にもこの資格を与えることができる。要するに、このような特質が、見られてはいるが気づかれぬままに存在しているからこそ、成員たちは、このことを利用しながら、自分たちの日常会話の茶飯事を支障なく処理してゆく資格を得ることができるのである。(訳書 41: 強調(´) は原著, (・) は訳者による)

このような文脈依存性とそのなかでの秩序性は言語だけでなく、非言語的な身体的振る舞いについても同様に当てはまる。Ryle (1968) はウィンクを例に、右目の瞼を閉じるという行為はある者にとっては何の意図もない行動であるのに対し、他の少年が送るウィンクは「友人への悪だくみの合図」として見られるだろうし、また、その不器用なウィンクを見た友人がわざと「滑稽に真似をしてみせる」それはウィンクの送り手を茶化するものとして見られると述べる。これらの意味付与は受け手の存在・理解なくしては達成できないものであり、その瞼の動きが何ものであるかは行為者の意図を訊き出すことによってではなく、行為者・受け手間の相互行為に照準することで描くことができる。

Durkheim 以来、社会学においては以上のような言語や行為の文脈依存性＝インデックス性は客観的事実へと修復・矯正されるべき対象と見なされてきた。その修復とはインデックス性をともなう社会的事象に客観的な定義を与えることによって為されるのであり、社会科学はそうして定義づけられた諸変数間の因果的仮説を示し、量的データを取集・分析することでそれを検証するといった手順で理論構築をはかることを目指してきた。質的調査においても、さまざまな情報源に取材するデータ・トライアンギュレーションによって多面的確実性が目指されたり、グラウンデッド・セオリー (Glaser and Strauss 1967) において、データ・サンプリングや特徴的なテキストのコーディング作業を手順化することで、データ解釈への信憑性を高める試みが模索されてきた。

このようなインデックス性の修復とそれによる一般理論の構築という社会科学の営みを Garfinkel and Sacks は「構築的分析」と呼んで、その困難を指摘する。彼らは、社会学者たちは人びとの常識的知識・自然言語やそれに基づく実践といったインデックス的表現を自分たちが定義づける客観的事実の「貧弱な対応物」と見なしているが、人びとが研究者が作り出す客観的表現や一般理論に頼ることなく、ごくありふれた会話や行為を織りなすその度ごとの実践のなかで／として秩序を生み出している点に注目する。こうした見方からは次のようなアプローチが懸念されることになる。それは、インデックス的表現が人びとにとっては十分に合理的で理解可能なものであるにも拘わらず、それを二次的な付帯現象として取り扱ってしまい、それを矯正し、客観的な表現へと置き換えていくアプローチである。これによっては、かえってその

場の実践のなかで／として産出されている固有の合理的特性を捉え損ねてしまうことになる。

さらに、Wittgenstein 派のエスノメソドロジストである Coulter (1979) は一般理論化の不可能性をより強く主張している。

わたしが何を考え、何を思い、どんな理由づけを導くことができるかは、わたしがいま現在どのような社会的に共有された概念や理由づけのやり方を利用できるかによって、(そのつど) 制限されている。このことは疑いえない。しかしだからといって、わたしが実際に何を考え、何を思い、どんな理由づけを導くかは、わたしを取り巻く状況やわたしの社会構造上の位置によって、因果的に決まるわけでも、あらかじめ指定されるわけでもない。わたしの周囲の状況は、わたしにとっては一つの資源として役立つだけで、他の人たちにとっては、わたしのことやわたしのふるまいを理解したり価値評価するための、一つの情報を提供するだけである。わたしの周囲の状況は、けっして、わたしが考える事柄、わたしが導く理由づけの決定要因ではないし、わたしが世界のことをどう思い、どう理解し、どう解釈するかの決定要因でもない。

(中略) わたしの行為や発話は、匿名の社会的プログラムにもとづいて出力されたものではないのだ。わたしが何を考えたり等々するかについては、あくまでもわたしが責任をもっている。この責任を私自身から剥ぎ取って他人にかぶせたり、まして社会学的な抽象物にかぶせることなどできない。(訳書 245-246, 強調は原著)

社会構造はその下で可能な行為を制限する、すなわちある活動をやってしかるべきものとし、他の活動を禁止するかもしれないが、これはその条件が必ず特定の行為を引き起こすことと同じではない、と Coulter は説く。彼はある社会的手続きや文化的慣習が因果的に作用して一定の行為がなされたと述べられることはあるが、それに従わない者もあり、行為の文脈依存性を有限個の先行する条件に整理することの不可能性を確認したのだと言える(訳書 33-40)。

同様に Schegloff (1987: 訳書 157) は、「ある場を記述する方法の集合は、無際限に拡大しうる。それゆえ、何らかの特定の特徴付けが精確であるということは、それだけではその特徴付けを使用するための十分な保証とならない」と述べ、病院内での医師と患者の会話を例に、その事実だけでは、それが {医師・患者} 間の会話であるとは特徴づけられないことを、患者もまた医師である場合を想起させることで指摘する。この例は、病状に関する会話は {医師} から {患者} への診察ではなく、{医師} 同士の専門的議論として理解される可能性があることを示している。また、彼／女らの振舞い・発言によっては、両者の会話は {医師・患者} 間ではなく {男性・女性} 間のそれとして立ち現れることもあるだろう。つまり、特定の制度的状況や成員性そのものが人びとの相互行為を外側から規定するのではなく、その場面がどのようなも

のであり、そこに居る人びとが何者であるのかは、その場の相互行為のなかで／として成し遂げられているのである。

また、「エスノメソドロジーの洞察に学ぶ構築主義」を掲げる中河は、研究者が措定する因果モデルは研究者による「学問的営みの中でのみ成り立つものであり、対象となる人びとの営みの秩序（規則性）に肉迫しない」（中河 2001：39）とし、このような因果モデルの矢印は実践における事象間関係とは「矢印の向きが逆」だと論じている（中河 2005：180、強調は原著。他に中河 1999）。ここでは、先行する行為が後続の行為を引き起こすのではなく、ある相互行為のなかで、人びとが前者を参照することで、それが後者の原因として表出するとの関係性が指摘されている。

以上のように、あらゆる表現はインデックス性をともなう文脈依存的なものであり、それを矯正し、「客観的事実」として定義づけること、そしてそれを起点として事象間に因果関係を見出そうとする構築的分析は独自の困難を抱えているように思われる。人びとはインデックスの表現を十分に合理的で理解可能なものとして使用しており、研究者がそれを定義づけ一般化された概念へと置き換えていくことは、かえってその場の実践を見失う帰結をもたらす。また、社会構造上の諸条件は可能な行為を制限するかもしれないが、それが原因となって特定の行為を常に引き起こすわけではない。一般理論化をめざす構築的分析者はこれらの困難とどう向き合っていくのかが問われているのだと言えよう。

### 3. 人びとの方法・能力を記述する — 自然言語の習熟

Garfinkel and Sacks (1970) は、その場で交わされる、インデックス性をともなった、そして科学的な手続きや概念的な定義づけという基礎づけが施されていない通常の表現を「自然言語」と呼び、それに習熟した者を「メンバー」と呼んだ。メンバーとは、特定の組織・集団に所属する成員やその場面への参与者であることを意味するわけではなく、その場で為されている相互行為が何を意味しているのか、一瞥でわかる能力を身につけている者のことを言う。この能力とは、科学的理論的な事柄に関する知識や理解力といったもののみを意味するのではなく、むしろ人びとが日常生活をそれとして送っていく際に使用する、自他の言葉や振舞いを理解する通常的能力を含んだものである。

ただし、母語を話すことと同様に、往々にしてメンバーは自分たちが習熟している自然言語の使用法は知っている（身につけている）ものの、それを的確に説明・分析できるとは限らない。このことを Garfinkel (1967) は「見られてはいるが、気づかれていない」と表現し、それを露わにするために「違背実験」を自らの学生に課している。これは相手が用いた平凡な言葉の意味を明確にするように要求することであり、その結果は次のようなものであった。

「金曜日の晩、夫と私はテレビを見ていた。夫は疲れたと言った。私は『どんなふうに疲れたの。身体なの神経なの、それともテレビに飽きてしまったの?』と聞

き返した」

(被験者) わからないよ。たぶん身体だろう。

(実験者) 筋肉とか骨のことなの？

(被験者) そうだろうけど、そんなに専門的に聞かないでよ。

(しばらくテレビを見た後で)

(被験者) こういった昔の映画は、どれも同じような相変わらずの筋書だね。

(実験者) それどういうこと？昔の映画のすべて、それともいくつか、あるいはあなたがいままで見てきた映画のこと？

(被験者) 何を言ってるんだ？おれの言いたいことはわかるんだろ。

(実験者) もっとくわしく言ってほしいのよ。

(被験者) おれの言いたいことはわかってるくせに！いいかげんにしろ！（訳書 43）

以上の「実験」は次のことを示唆している。第一は、人びとは日常生活のなかで、一つ一つの事象を明確に定義づけることなく、会話を進めていくことができる点である。通常は、妻は夫の疲れを細部にわたって同定せずとも、会話を続けていくことができるし、むしろそれが自然なこととして期待されている。これに関連して第二は、話し手は聞き手が自分の話を理解してくれるものだという期待を持っている点である。メンバーはその話題が何であり、また、相手が話していることが何であるのかを理解し、同様に、自分が何を話しているかが相手によって理解できる、そして理解されなければならないという期待を持っている。すなわち日常の会話はこうした規範性をともなって進行しているものであり、そうした期待が破棄された時には、会話の円滑な進行が破綻し、怒りを表示することによって通常の状態への回復がはかれるのである。第三は、それぞれの発言はインデックス的なものであり、それがどのような意味を持つのかは文脈に依存する点である。「疲れた」との発言に対し「身体か神経か」を、そしてまた「筋肉か骨か」を問うことは診察室での患者と医師の会話であれば自然なものとして聞くことができる。「実験者」の問いかけに「被験者」が苛立つのは、それがリビングでの {夫・妻} の会話だからであり、「被験者」の怒りは「実験者」の「問診」が {夫・妻} という成員カテゴリーにとって適切ではないものであることを示す指し手となっている。

以上のような違背実験から進み、Garfinkel and Sacks は、メンバーであること、すなわち自然言語に習熟することとは、その場に関連性を持つ（レリヴァントである）日常的・専門的な諸概念を身につけ、その場で見られ／聞かれていることが何であるのかを理解でき、そして相互に行為しながらその場の文脈を作り上げていくことができることとし、その具体的な実践を解明することをEMの課題として設定する。つまり、EMはメンバーが既に身につけている、そのやり方を（再）特定化することを試みるのであり、それは、ある事象についてのメンバーの知識を集め、一般化したモデルや理論を構築する経験的な調査とは異なる試みとなる<sup>5</sup>。

#### 4. 誰がエスノメソドロジーで／を明らかにするのか ― 方法の固有の妥当性要請

EMは特定の理論や規範に与することなく、また対象となる実践が誰によって行われようとも、その妥当性や価値、重要性、実用性等についてのあらゆる判断を差し控える。Garfinkel and Sacks (1970) はこのような手続き上の方針を「エスノメソドロジー的無関心」と呼んだ。無関心とは、否定や対立と同義ではなく、対象となる人びとの立場に対していかなるコミットメントも行わないことを意味する。Garfinkel (1967)はまた、EMはアイロニーとして行われると無益であると説いている。つまり、EM的無関心とは、研究者が人びとの実践を見る前にあらかじめ特定の立場をとってしまわないこと、そして、それを見るなかで人びとの立場に賛同／批判したり<sup>6</sup>、「現実人は人びとがそう見なしているようなものではあり得ない」といったアイロニカルな論評<sup>7</sup>をしないことを含んだ方針だと言うことができる。

このような方針は、Sacks が切り拓いた会話分析のなかに典型的に見ることができる。会話分析は録音録画されたデータをもとに会話における順番取りや隣接ペアなどの連鎖構造に対する分析を試みる。検討対象となるデータは会話の断片であり、そこで話されている内容自体が問題とされることはない。ただし、このことはEMが内容を取り扱うことを禁じていることを意味するわけではない。EMは実践における人びとの方法・能力に照準するが、人びとが織りなす内容は、彼／彼女の方法・能力によってそれとして理解され、その場の文脈を構成するものである以上、内容に目を向けることで、そこでの方法・能力をより明晰に描けることもあるだろう。例えば、Sacks が提示した成員カテゴリー化装置は、成員が共有する規範の内容に言及した上で、それらの使用やそれらを使用できる能力を明らかにするものであった<sup>8</sup>。EMにとって気をつけなければならないことは、相互行為によって産出された内容を追うことに熱心になるあまりに、人びとの方法・能力への照準がおろそかになってしまうこと、内容を集めてそこに生起している関係性を一般化した上で、人びとの実践をその一部に回収してしまおうとすること、ということになるだろう。

このようにエスノメソドロジストはその場の人びとにとってレリヴァントでない枠組みや評価を対象に押しつけることなく、人びとの実践を記述する。近年は会話分析による経験的研究が蓄積されてきたが、これと関わりながらも、「複雑な活動を作り出すにあたってのメンバーの方法と能力とを調べようとするプログラム」として「ワークの研究」が知られている (Francis and Hester 2004: 訳書 39)。ここで「ワーク」とは、労働としての仕事に限定されるものではなく、ジャズピアノの演奏 (Sudnow 1978) や、天文学者たちが日常的な常識と専門的知識を参照しながら、脈動星を発見していく実践 (Garfinkel, Lynch and Livingston 1981) 等、人びとがある特定の分野に関する自然言語・技能に習熟し、自他の行為を表示・理解しあいながら繰り返される実践全般を意味するものである。ワークをそれとして理解・達成している人びとの能力には普通の会話を進めていく常識的な能力に加え、その場固有の能力が含まれる。例えば、ジャズミュージシャンにはジャズミュージシャンの、天文学者には天文学者のワークを進めていく上での固有の能力が存在しており、それらが日常的な能力とあ

いまって、その場のやりとりをそれとして理解し、進めていくことを可能にしている。

そうである以上、調査者が人びとのワークを明らかにするには、調査者もまたそのワークに従事するメンバーと同じ能力、少なくともそこで何が為されているのかが理解できる程度の能力が求められることになる。Garfinkel は E M の調査者に求められるこうした要請を「方法の固有の妥当性要請 (unique adequacy requirement of methods)」と呼び、調査者が対象となる社会的事象に十分に浸されることを通じて、それについて学び、また、そのやり方を身につけることを要求した (Garfinkel and Wieder 1992)。実際彼は自らの学生に「ハイブリッド」になること、すなわち社会学とは別の専門的知識を身につけ、その分野の自然言語を習熟することを求めた (Lynch 1993)。

このような、人びとのワークを理解する能力について Lynch (1993: 訳書 350-352) は、Chomsky の言を借りて「通常科学」を行うための能力と言いつている<sup>9</sup>。それは、社会学方法論の特別な知識ではない、人びとが日常的に行う用法としての観察・記述・比較といった活動によって構成される。E M は、人びとが日常的に行う、出来事と出来事を比較したり、証拠を吟味したり、共通の直観や判断に訴えるといった方法論を分析の対象としつつ、かつ、それを自らの方法論として用いるのである。

##### 5. どのようにして「ハイブリッド」になるのか——研究者かつメンバーになること

E M 研究における調査者には、人びとが話し、行っていることを理解し、自らもそれを実践する能力を持つことが要求される。普段の何気ない日常会話を対象とする会話分析であるならば、分析にあたる者も会話を遂行する能力を既に身につけているので、「メンバー」となるためにとりたてて特別な知識や能力をあらたに獲得する必要はない。しかし、冒頭に例示したやりとりを理解し、A や B と同じようにやってみせることができるためには、例えばエアコンとは何かを知っていることが求められる。エアコンを知らない昔の日本人や未開の部族民が A・B 間のやりとりを見ても、「エアコンつけたよ」という発話を窓を閉める「依頼」として聞くことはできないはずだ。となると、例えば、実験室において科学者たちのやりとりを分析しようとする者には、彼／女らが用いる専門用語を理解する能力や、彼／女らが目にする対象を見て同じものを見てとる能力（例えば、電子顕微鏡の画像を見てそこに細胞やそれにメスでつけた傷を見てとる能力）を身につけることが求められることになる。つまり、調査者は「ハイブリッド」になり、その場の自然言語に習熟することが必要となる。そのために調査者は一定期間フィールドに浸され、対象となる人びととともに過ごし、彼／女らとやりとりを重ねることによって「ネイティブ」となることを試みる。

他方で、既にある分野に精通した者が研究としての E M の考え方に習熟することで「ハイブリッド」になることも一つの経路としてあり得るだろう。私のエスノメソドロジストとしての在り方はそのようなものである。私は公立学校の教諭として 23 年間勤務し、そのうち 7 年間は大学院等で学んでいた<sup>10</sup>。論文執筆に向けた中学校でのフィールドワークは、大学院生かつ現職教員としての立場で行われたものである<sup>11</sup>。

長期にわたる公立高校・中学校の教諭としての経験は、私が学校現場における「自然言語」に習熟していることを一定程度保証するものとなるだろう。もっとも校種によってメンバーが習熟している自然言語は異なるだろうし、それぞれの学校ごとに、また同一の学校であっても時代ごとに流通している言語は異なったものになり得る。このため、調査にあたっては対象校に「浸る」経験は欠かせない点は、程度の差こそあれ他の調査者と同様である。

他方で、調査者が対象者と類似の経験を持つことの両義性についても自覚的である必要があるだろう。対象者との自然言語の共有は記述すべき対象を「見られてはいるがしかし気づかれずに」いる状態にとどめてしまう危険性をも併せ持つ。メンバーは自らの能力に応じて行為を展開するものの、その能力が何から構成され、どのように作用しているのかについて尋ねられてもほとんど語ることができないし（例えば、母語を話すことはできても、その文法を正確に説明することができない等）、自分たちのやりとりをその場とは関係のない制度的・文化的枠組みを滑り込ませて説明してしまうこともよくある話だ。つまり、調査者が対象者と同じやり方やそれについての語り口を身につけることとそれを分析的に記述できることは同じではない。

Psathas (1988: 訳書 24-25) は、人びとは自分たちがどのように日常の活動を成し遂げているかを自覚しておらず、それを的確に説明できるわけではないとした上で、EMのアプローチとして、第一に、入念な観察や質問により、メンバーが使用する常識的な理解や言葉を収集・分類し、第二に、対象となる活動がどうやって成し遂げられているかを主題に据えると述べている。これに照らし合わせるならば、まったくの「よそ者」でなく、また完全なメンバーでもないというマージナルな私の特性は、第一の点については有効に働く可能性があると言える。しかしこの特性は、第二の点、すなわち日常的には自明である彼／我のやり方をトピックとした分析を行うという点においては、貢献するところがない。分析の確からしさはEMの方針への理解を深めることや分析の経験を蓄積すること、とりわけデータセッション等の機会を通じた切磋琢磨によって高められるものであろう。

## 6. むすびにかえて

以上に、EMが明らかにするものとエスノメソドロジストに求められる能力について素描してきた。冒頭の断片への分析で試みたのは、EMが従来の社会科学的な説明とは対象の取り扱い方、それを扱う者に求められる能力、あるいは知見の身分において異なることを不十分にではあれ示すことであった。EMは、研究者が概念定義や理論を外挿するのではなく、その場の人びとの実践に即して、(時に序列をともなった)ある主部と(時に強い規範性をともなって)それと結びついた述部の関係が参照され、自他の行為が理解可能となっていることを記述する。私たちは、「エアコンつけたよ」のように、あることを言うことでそこで述べられた内容とは異なる別の何かをすることができる。また、「あ」や「ってか」と短く発せられた語や身体的動作は、語り手の今の、そして後続する状態や行為の意味を表示しながら、聞き手の理解や反応を促

すものとなっている。「あ」や「席を立つ」といった発語や身体的動作は文脈依存的に意味を与えられており、それ自体に特定の意味が内在するわけではない。

人びとがインデックス的表現によりながらもそれを理解し、やりとりを組み立てていけるのは彼／女らの能力によるものである。この能力、すなわち自然言語の習熟とは単に文化的社会的な言語資源や慣習に係る諸概念について知っているということではなく、それらがその場で何を意味しているのか、一瞥で理解でき、それらをその場にレリヴァントなものとして使用できることを意味する。それはまた、科学的専門的な定義や理論によって基礎づけられるのではなく、常識的知識を参照して日常的行為を理解するための通常的能力である。そして、調査者が人びとの実践を記述しようとするなら、調査者自身も研究法に精通するだけでなく自然言語に習熟することが求められる。これとは反対に、ある場における「ネイティブ」が研究法を身につけることでハイブリッド化する道もあるだろう。

EMは探究にあたって対象の妥当性や価値等に対する判断を差し控える。人びとの実践にアイロニカルな、あるいは称賛するような論評を与えないということは、現状の改善とは直接に結びつかないかもしれない。しかし、改善に向けた営みにとって、人びとの実践の成り立ちを理解することが検討の起点となるはずだ<sup>12</sup>。ともあれ、改善すべき実践に宛てられた方策が、当のその実践のなかに埋め込まれることから逃れられないということはいくら強調してもし過ぎることはない。私たちは実践の外側からそれを規定する「アルキメデスの点」を持たない。その方策は人びとに参照されるかもしれないし、されないかもしれない。またそれは、誰がどのように参照するかによって異なるはたらきを与えられる。「そんなことを気にしては何もできない」という研究者／実務家の声も聞こえてきそうだが、「それでもすべては実践のなかにある」と答えるほかない。

<sup>1</sup> 「すいません」は他に呼び掛けとしても用いられ得る。

<sup>2</sup> Goffman (1961: 訳書vi) は次のように述べている。「おそらく、その中で子どもたちがみな寒さでふるえている一つの大きな素晴らしい天幕よりも、別々の衣服を一人ひとりにちゃんと着せるほうがよいのだ」。

<sup>3</sup> この点については、鈴木 (2017a), 鈴木 (2017b) を参照されたい。

<sup>4</sup> 日常的な実践それ自体へと目を向けることの重要性は、Wittgenstein (1953) によって説かれている。彼は『哲学探究』のなかで、論理的な命題構造に関する諸規則の追究が、理想的な条件をめざし、具体的で日常的な語の使用から離れることで「滑らかな氷の上」に迷い込み、摩擦のなさゆえに先に進むことができなくなっているとし、「ザラザラした大地に戻れ」と訴えている (§ 107)。ここに、形而上学的な語の用法からその日常的で具体的な使用へと探究の対象を写すべきとのWittgensteinの主張を見ることができる。

- <sup>5</sup> Lynch (1993: 訳書 236) の以下の記述を参照のこと。「EMにおいて産出される後期ウィトゲンシュタインの哲学の拡張とは、経験的な社会学へとふみだすことであるというよりも、むしろ、認識論上の中心的な概念やテーマの意味を再発見するよう試みることなのである。(略) このことに含まれるのは、言語使用の「想像上の」探究を「現実の」エスノグラフィーへと代えることであるよりも、むしろ、中心的な概念の定義から、そうした概念によって注釈される活動の産出の探究へと、踏み出すことなのである」。
- <sup>6</sup> Coulter (1979: 52-55) は、精神病患者への入院説得場面に対する Goffman の分析を例に、職員が精神疾患に触れずに病院への連行を試みる行為のなかに患者候補者に対する裏切りを見てしまうことは、ある一つの可能な見方に与し、他を斥けるという皮肉に満ちた見方であり、「その出会いのあり方がどのような組織的構造をもち、どのような理由づけの慣習にしたがっているかを、方法論的に統制されたしかたで明らかにしようとするのではない」と述べている。
- <sup>7</sup> この言い回しは従来の社会学のアイロニカルな方針について述べた Ibara and Kitsuse (1993) によるものである。
- <sup>8</sup> 成員カテゴリー化装置については、鈴木 (2019) で検討しているので、そちらをご参照されたい。
- <sup>9</sup> Lynch (1993: 訳書 433 注 79) は、Chomsky が「通常科学」との語を 1990 年春のボストンでの東部社会学学会年次大会におけるやりとりのなかで用いたことを紹介している。
- <sup>10</sup> 勤務経歴は以下の通りである (③を除いて、すべて県立高校)。①「教育困難校」である昼間定時制高校に 3 年間、②県内屈指の伝統校に 4 年間、③高校・中学校間の人事交流事業により市立中学校に 3 年間、④県内有数の進学校に 5 年間 (うち 1 年間は大学院等派遣研究に従事)、⑤通信制高校に 7 年間 (うち 6 年間は大学院在籍)。
- <sup>11</sup> 鈴木 (2011, 2012, 2014, 2015, 2016, 2017c) を参照されたい。ただし、鈴木 (2011) は EM の方針を採用しておらず、鈴木 (2012) についても構築主義的アプローチから分析を加えたものである。構築主義と EM との関係については、鈴木 (2019) で論じた。
- <sup>12</sup> もちろん、「改善」を掲げる者に対しては、その「改善」が誰にとっての「改善」なのかという点に対して、確かな吟味を加える必要があるだろう。

## 参考文献

- Coulter, J., 1979, *The Social Construction of Mind: Studies in Ethnomethodology and Linguistic Philosophy*, London: Macmillan, (= 1998, 西阪仰訳『心の社会的構成 — ウィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』新曜社) .
- Durkheim, E., 1895[1937], *Les Règles de la méthode sociologique*, Presses

- Universitaires de France, (= 1978, 宮島喬訳『社会学的方法の規準』岩波書店) .
- Francis, D. and Hester, S., 2004, *An Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*, Sage, (= 2013, 中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳『エスノメソドロジーへの招待 — 言語・社会・相互行為』ナカニシヤ出版) .
- Garfinkel, H., 1967, *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall, (= 1989[第二章抄訳]「日常活動の基盤」北澤裕・西阪仰編訳『日常性の解剖学』マルジュ社, pp.31-92).
- Garfinkel, H. and Sacks, H., 1970, "On Formal Structures of Practical Actions," Mckinney, J. and Tiryakian, E. eds., *Theoretical Sociology: Perspectives and Developments*, Appleton Century Crofts, pp. 337-366.
- Garfinkel, H., Lynch, M. and Livingston, E., 1981, "The Work of a Discovering Science Construed with Materials from the Optically Discovered Pulsar," *Philosophy of the Social Sciences*, vol.11, no.2, pp.131-158.
- Garfinkel, H. and Wieder, L. D., 1992, "Two Incommensurable, Asymmetrically Alternate Technologies of Social Analysis," Watson, G., Seiler, R.M. eds., *Text in Context: Studies in Ethnomethodology*, Newbury Park, etc. Sage, pp.175-206.
- Glaser, B. G., and Strauss, A. L., 1967, *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*, Chicago: Aldine Publishing Company, (= 1996, 後藤隆・大出春江・水野節夫訳『データ対話型理論の発見 — 調査からいかに理論をうみだすか』新曜社) .
- Goffman, E., 1961, *Asylums: Essays on the Social Situation of Mental Patient and Other Inmates*. New York: Anchor Books, (= 1984 石黒毅訳『アサイラム』誠信書房) .
- Ibara, P. R. and Kitsuse, J. I., 1993, "Vernacular Constituents of Moral Discourse: An Interactionist Proposal for the Study of Social Problems," *Reconsidering Social Constructionism*, Aldine de Gruyter, pp.25-58, (= 2000, 中河伸俊訳「道徳的ディスコースの日常言語的な構成要素」平英美, 中河伸俊編『構築主義の社会学』世界思想社, pp.46-104).
- Lynch, M., 1993, *Scientific Practice and Ordinary Action: Ethnomethodology and Social Studies of Science*, Cambridge University Press, (= 2012, 水川喜文・中村和生監訳『エスノメソドロジーと科学実践の社会学』勁草書房) .
- 中河伸俊, 1999, 『社会問題の社会学』世界思想社.
- 中河伸俊, 2001, 「方法論のジャングルを越えて」『理論と方法』16(1), pp.31-46.
- 中河伸俊, 2005, 「『どのように』と『なに』の往還」盛山和夫他編『〈社会〉への知／現代社会学の理論と方法(下)』勁草書房, pp.165-189.
- 西阪仰, 2001, 『心と行為』岩波書店.
- Psathas, G., 1988, *Ethnomethodology as a Development in the Social Sciences*,

- Lecture Presented to the Faculty of Waseda University, Tokyo, (= 1989, 北澤裕・西阪仰訳「序論 エスノメソドロジー — 社会科学における新たな展開」『日常性の解剖学』マルジュ社, pp.5-30).
- Ryle, G., 1968[2009], “The Thinking of Thoughts: What is 'Le Penseur' Doing?”, *Collected Papers vol. 2*, Routledge, pp.494-510.
- Schegloff, E. A., 1987, “Between Micro and Macro: Context and Other Connections,” Alexander, J. C., Giesen, B., Munch, R. and Smelser, N. J. eds., *The Micro-Macro Link*, University of California Press, Berkley, (= 1998, 「ミクロとマクロの間 — コンテキスト概念による接続策とその他の接続策」石井幸夫訳『ミクロ・マクロ・リンクの社会理論』神泉社, pp.139-178) .
- Sudnow, D., 1978, *Ways of the Hand: The Organization of Improvised Conduct*, Harvard University Press, (= 1993, 徳丸吉彦・村田公一・ト田隆嗣訳『鍵盤を駆ける手 — 社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』新曜社) .
- 鈴木雅博, 2011, 「学校における組織的意思決定と教師の自律性との関係性—教師が語る言説の機能に着目して—」日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第37号, pp.100-117.
- 鈴木雅博, 2012, 「生活指導事項の構築過程における教師間相互行為—日常言語的な資源としてのレトリックに着目して—」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第90集, pp.146-167.
- 鈴木雅博, 2014, 「学校現場におけるアカウントビリティ概念の作用と帰結—ミクロ・ポリティクスの視角からの検討—」日本教育行政学会編『日本教育行政学会年報』第40号, pp.73-90.
- 鈴木雅博, 2015, 「教員コードによる職員会議の秩序構築—解釈的アプローチによる相互行為分析—」日本教育経営学会編『日本教育経営学会紀要』第57号, pp.64-78.
- 鈴木雅博, 2016, 「教師は曖昧な校則下での厳格な指導をどう論じたか—エスノメソドロジーのアプローチから—」日本教育社会学会編『教育社会学研究』第99集, pp.47-67.
- 鈴木雅博, 2017a, 「学校組織研究が「見落としてきたもの」—教育行政学・教育経営学における学校組織研究の再検討—」『常葉大学教育学部紀要』第38号, pp.69-92.
- 鈴木雅博, 2017b, 「学校教師のエスノメソドロジー研究に向けて—社会的アプローチによる学校組織研究への再検討を通して—」『常葉大学外国語学部紀要』第34号, pp.1-24.
- 鈴木雅博, 2017c, 「教師による実践のなかの／としての学校組織—「会議をする」ことのエスノメソドロジー研究—」博士学位論文（東京大学）.
- 鈴木雅博, 2019, 「エスノメソドロジーと構築主義—何のためにカテゴリー化実践を記述するのか—」『常葉大学外国語学部紀要』第35号（印刷中）.

高木智世・細田由利・森田笑, 2016, 『会話分析の基礎』ひつじ書房.

Wittgenstein, L., 1953, *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, (= 1976,  
藤本隆志訳『哲学探究』ウィトゲンシュタイン全集 8, 大修館書店) .